

<今回>213回目 2017年6月26(金)16時~18時 1503号室
読書は8冊目「邪馬壹国の論理」273P 海の四至 より

<前回>211回目(17-6-2) 出席者6名
資料 17-06-02-1) 前回のまとめ(清水)
-2)海賦(河口)
-3)岩戸山古墳雑感(清水)

A 報告

長谷さんの訃報を受けた。2月に亡くなられたと多元のHPに連絡があり、西坂氏より、和田事務局長他に連絡があった。私のアドレスを変えていたのを知らず、私の知ったのは和田氏からの電話だった。早速長谷さんのアドレスに何でもよいから教えてほしいとメールを入れたが返事はなかった。昨年暮れあたりには親族に不幸があり東奔西走で疲れたという話は聞いていたがご本人が健康を害していたとは知りませんでした。1月には机に向かって勉強していたようなことがメールに入っていたようです。

津多屋9180円(1500・5) - 1680円

B 資料 -2) 東戸塚の古代史講座で使用した海賦(この本の392p資料と同じ)をこれから読むところなので最初にポイントを紹介した。裸人国、黒齒国がでてくる。一越3千里など魏志倭人伝と同じ表現がる。また北部九州装飾古墳の旅の最後、立原古墳の壁画の物語性について感想会をした。石室の両側の絵が判読されて、東西南北と説明されたが奥が龍で左側が白虎なら右が判読不明だからあわない気がする。

C 読書 p261 海賦と壁画古墳

- 1)「文選」は6世紀の梁の昭明太子の撰。それ以前の秀詩、名文を集成した本。先生は魏晋朝短里の例を調べていた。西晋左思の三都賦の中に3つの里を見つけた。賦の作り方として地図に基づき実に基づくのが賦の特質という。
- 2)そして或いは裸人の国に掣掣洩洩し、国齒の邦に汎汎悠悠すの言葉を海賦の中に発見した。また倭人航海の持衰のことを述べているところを見つけた。すなわち海賦の重要な主題が倭人であることについて次々証拠が出てきた。
- 3)著者木華は禹の聖績のことから説き始める。禹の東治と同じ発想、万里の語、一越三千里、倭人から援軍の要請があれば王命が発せられ急使が駆け付けて事件は解決した。卑弥呼と狗奴国との交戦、張政の派遣により危険は沈静された。
- 4)3千里と1万里の表現が倭人伝と海賦に共通している(同じ短里)こと。倭国の首都が九州沿岸の位置に描かれていること。
- 5)是に於いて舟人、漁子、南に行き東に極まる。海流に乗っていけば東へ転じ極点をなす大地がある。アオウミガメ、オオトカゲが棲息し切り立った断崖が海岸に突き出ている。
- 6)日本の青年、堀江ヨット冒険の例などをあげる。海賦は陳寿の倭人伝の内実と見事な対応を持つ。倭人航海史料、華麗な美文集だけではなく3世紀において倭人の報告をもとにした魏晋朝官人の記録、全く別個の異系統の史料の一致するときそれは真実と認められる。

次回日程 17-7-7日(金)16時から19時 1503号室
7-24(金)15時から18時 1503号室